

# 『源氏物語』 幻巻における光源氏と夕霧の関係

——くだものの供応を端緒として——

萩田 みどり

## はじめに

『源氏物語』幻巻は、紫の上の死を哀惜する光源氏の晩年の一年間を、季節の移り変わりとともに描く巻である。あらゆる景物が紫の上を追懐させ、その心情が和歌や歌語表現によって表されている。幻巻における和歌の機能については、小町谷照彦氏が「一年の時間の外枠は、和歌による季節の進行と有機的に結びついていた心情描写によって、内側からその支えを得るのである。」<sup>1</sup>と述べた上で、光源氏の終焉という、散文では賄いきれない感情を表すには和歌が効果的であったことを論じている。また、神野藤昭夫氏は幻巻を「正篇を貫ぬく愛の物語の閉じめ」と位置付ける中で、「哀傷の十二カ月ともいうべき歌物語の構造をも」ち、さらに発想の基盤には「勅撰集哀傷の部」が考えられることを指摘している。<sup>2</sup>

このように、多くの和歌や歌語表現が散りばめられている幻巻

において、本稿ではくだものを供する場面に注目する。夏五月の夜、夕霧が父光源氏を訪ねたときのことである。源氏は夕霧のためにくだものを用意するよう女房に命じる。

『源氏物語』が食べ物を描くことに消極的であることは、先学<sup>3</sup>に指摘されてきた通りである。しかし、この場面は、割合食事が描かれるような饗礼や饗宴でもなく、また、自分の低い者を貶める意味で描かれているわけでもない。地の文、会話文ともに歌語や古歌、漢詩を引用しながら、源氏の沈鬱たる様子を語る場面である。紫の上の死を嘆き、源氏自身出家への準備を進めるこの巻の特質を考えたとき、もてなすためとはいえ、生きるために必要な食べ物を描くことには、違和感がある。その上、源氏が女房に供応を命じる上で、「男ども召さんもこととききほどなり」(幻巻④五四〇頁)<sup>4</sup>と、男を呼ぶのは時間的に大げさであるという弁解まで口にしてしている。では、当該場面において、敢えて源氏が夕霧にくだものを供することを描く意図はどこにあったのだろうか。

本稿では、当該場面の流れを把握し直した上で、訪問客にくだものがふるまわれる例などを調査することで、源氏がぐだものの供応を命じた意図を探る。また、これを踏まえたとき、源氏と夕霧の関係がどのように読み取れるか、検討したい。

### 一 経緯と先行研究

まず、当該場面に至る経緯を、源氏の心境を中心に検証する。源氏は紫の上の死後、ほとんど人と対面しなくなっていた。この理由について、次のような源氏の考えが語られていた。

人に対はむほどばかりは、さかしく思ひしづめ心をさめむと思ふとも、月ごろにほげにたらむ身のありさまかたくなしきひが事まじりて、末の世の人にもなやまれむ後の名さへうたてあるべし、思ひほれてなん人にも見えざむなると言はれんも同じことなれど、なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも、見苦しきことの目に見るは、こよなく際まさりてをこなり、と思せば、大将の君などにだに、御簾隔ててぞ対面したまひける。(幻巻④五二七頁)

源氏は、後世悪い評判が立つことを恐れ、対面を避けていた。人と対面すると、気持ちを引き締めていようと思っても、歯止めがきかずにひねくれた愚痴などが混じってしまい、それが悪評に

つながることを懸念したためである。人と会わなくなった自身についてあれこれ想像されるより、見苦しいところを人目にさらす方が愚かなことだと考え、夕霧さえも御簾を隔てて対面していたという。当該場面直後にある源氏と夕霧が語り合っている場面でも、「何ごとにつけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて」(五四一頁)と、心弱さを抑えきれないながらも、それをさまり悪く思っている源氏の様子が語られている。つまり、源氏は極度に世評を気にし、息子である夕霧にも心を開かず、自身のほんやりと思いつめた姿を見せまいと考えていた。

そのような状態の源氏を、夕霧は久々に訪ねたのだった。以下、当該場面を引用する。

五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外のことなくさうざうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君御前にさぶらひたまふ。花橋の月影にいときはやかに見ゆるかをりも、追風なつかしければ、「千代をならせる声」もせなんと待たるるほどに、にはかに立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにて、おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、源氏「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。源氏「独り住みは、ことに変ることなけれど、あやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住

みせんにも、かくて身を馴らはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」などのたまひて、源氏「女房、ここにくだものなどまゐらせよ。男ども召さんもことごとしきほどなり」などのたまふ。  
(幻巻④五三九—五四〇頁)

五月雨が降り続く頃、十日余りの月が珍しく見えたため、夕霧は源氏を訪ねた。だが、天気は急変し、雨が降り出す。心細く思う源氏は、「窓をうつ声」と口ずさむ。これは、『和漢朗詠集』にも所収される『白氏文集』「上陽白髮人」の一節「耿耿たる残んの灯 壁に背けたる影 蕭蕭たる暗き雨 窓を打つ声」(一三二頁)による。玄宗皇帝の寵愛を楊貴妃に奪われ、閉ざされた上陽宮で一を生を送った宮女の悲しみを詠ったものであり、紫の上に死に後れた源氏の孤独感が重ね合わせられる。その声は、「妹が垣根におとなはせまほしき御声なり」という。この箇所について、『紫明抄』は「ひとりしてきくはかなしき郭公いもか、きねにをとなはせはや」(二四〇頁<sup>5</sup>)という出典未詳歌を引き、『河海抄』もそれに倣う。源氏のすばらしい声は愛しい紫の上に聞かせたいほどだったというのである。

このような声で口ずさんでいた源氏は、独り住みは妙に物足りないものと、寂しさを吐露する。今の暮らしに慣れておけば出家後の山住みも澄み切った気持ちで送れると考えるのも、独り寝の現状に寂しさを感じ、「心澄み」きつていないためであろう。前述した源氏の危惧通り、「かたくなしきひが事」(幻巻④五二七

頁)が混じってしまっている。その直後に、源氏は女房にくだものを供しよう命じる。

この場面については、玉上琢彌氏が次のように解説している。<sup>6</sup>

暗夜、父子が対座する。「窓を打つ声」と誦する源氏。

「いもが垣根におとなはせまほしき御声なり」は、夕霧の心中であるが、夕霧は、源氏の求道生活に紫の上の影を見ている。それは作者の心でもあり、読者の心でもある。が、源氏の「独り住みは、ことに変はる事なけれど」という言葉には、求道の色濃いひびきがある。そして、「あやしうさうくしくこそありけれ」だからこそ、真に「かくて身をならはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」と思うのである。そして彼は、自分の今の生活に来るべき出家への心の準備としての意義を見る。であるが、そのさびしさをあまりにも率直に口にしてしまったことに気づいて、急いで「女房、こゝに、くだものなど参らせよ」と言う。おっかけて「をのことも召さむも、ことごとしき程なり」と弁解する。実際に、男たちを呼び出すには遅い時刻だったのであるが、彼が女房にいつけるのは、先の言葉をこまかすための最もてつとりばやい方法なのである。

源氏が供応を命じたことについて、夕霧の前で思わず口にしてしまった弱音を、話題を変えてごまかすためであった、という玉上

氏の説に異論はない。源氏がくだものの準備を命じた言葉の直後には、「心には、ただ空をながめたまふ御気色の、尽きせず心苦しければ、」(五四〇頁)と、夕霧が源氏の物思いする様子をいたわしく思っていることが語られている。「心には」とあることから、思い悩む内面が、くだものの供応を命じる表向きの姿とは異なることも浮き彫りとなる。源氏は自身の気持ちちを心の内に収めて、表面上は気丈にふるまおうとしている。夕霧はそのような源氏の外面も、他者に見せまいとする内面をも、しっかりと捉えている。

しかし、なぜごまかす方法がくだものの供応を命じることであり、夜であるために男でなく女房を呼ぶことがわざわざ描かれているのだろうか。このことについては、考察の余地がある。次節では、くだものをもてなすとはどのような行為なのかを確認する。

## 二 くだものをもてなす行爲

くだものものは、果実だけでなくお菓子、酒の肴などを指す場合もあった。本稿では、種々の意味を含み込んだ広義の「くだもの」として捉え、くだものによってなす用例を見ていく。<sup>⑦</sup>

『源氏物語』中に「くだもの」は二七例(二六場面)ある。これらを提供される人物を男女で分類したところ、男性一八例(二七場面)、女性九例であった。

女性については、四例がくだものさえ食べない例である。残りも、体調不良などの女君にくだものを勧めている例である。<sup>⑧</sup>いずれも喜んで食べることはない。くだものが病氣の人でも食べられる軽食と考えられていたことが窺える。

ただし、『栄花物語』では、經典供養の準備の中で、「女房の食物、果物などすべし」(巻第十六・ものしづく<sup>⑨</sup>三三六頁)と、女房のためにくだものを準備させている。『枕草子』では「大きにてよきもの」(三五二頁)にくだものを挙げている。くだものであれば体調の悪い女性でも喜んで食べるのではないか、との推測があつて供しているともいえる。

他方、男性がくだものを供されている場合については、表1にまとめた。表1には用例前後の本文とともに、供する人、供される人、供された場所を示している。16は一場面に二例見られるため、一項目にまとめている。6・10については、主語がくだものを食する側(供される人)であるため、供する人に括弧を付した。9・11・15については、別の者に供応を命じているなど、もてなす主人格の人物(ホスト)と実際に準備した人物が異なるため、括弧内に主人格を示した。

この表を見ると、まず、すべてくだものに否定的な意味合いはない。8のみ贈物(献上品)であるが、基本的にすべて食している例と考えられる。なお、くだものを食べない例は、他作品を見ても女性ばかりである。男性が食欲不振の描写はあるものの、くだものには言及していない。<sup>⑩</sup>『栄花物語』において病悩していた

表1 男性がくだものを供される例

|    | 巻・頁    | 供する人    | 供される人 | 場所           |   |
|----|--------|---------|-------|--------------|---|
| 17 | 浮舟153  | 時方      | 匂宮    | 宇治隠れ家        | 時方、御手水、御くだものなど取りつぎてまゐるを御覧じて、                            |
| 16 | 東屋101  | 弁の尼     | 薫     | 宇治邸          | 尼君の方よりくだものまゐれり。(中略) 目とどめたまふほどに、くだもの急ぎにぞ見えける。(弁の尼歌)      |
| 15 | 総角292  | 大君(薫)   | 匂宮    | 宇治邸          | よくあるくだもの、肴など、さるべき人なども奉れたまへり。                            |
| 14 | 総角232  | 大君      | 薫     | 宇治邸          | 御くだものなど、わざとはなくしなしてまゐらせたまへり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり。 |
| 13 | 椎本211  | 大君      | 薫     | 宇治邸          | 御くだもの折敷二つばかりして、くだもの、盃ばかりさし出でたまへり。                       |
| 12 | 竹河69   | 藤侍徒     | 薫     | 玉鬘邸          | 浅香の折敷二つばかりして、くだもの、盃ばかりさし出でたまへり。                         |
| 11 | 幻540   | 光源氏(女房) | 夕霧    | 六条院          | 源氏「女房、ここにくだものなどまゐらせよ。男ども召さんもことごとしきほどなり」                 |
| 10 | 若菜下249 | (女房)    | 光源氏   | 六条院          | 静心なくさすがにながめられたまひて、御くだものばかりまゐりなどして大殿籠りぬ。                 |
| 9  | 行幸303  | 内大臣(廷臣) | 光源氏   | 大宮邸          | 騒がしきやうならむ」  |
| 8  | 行幸292  | 光源氏     | 冷泉帝   | 大原野          | 六条院より、御酒、御くだものなど奉らせたまへり。                                |
| 7  | 胡蝶185  | 玉鬘      | 光源氏   | 六条院<br>玉鬘の居所 | 箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、(源氏歌)                          |
| 6  | 少女38   | (内大臣)   | 夕霧ら   | 内大臣邸         | 暗うなれば、御殿油まゐり、御湯漬くだものなど、誰も誰も聞こしめず。                       |
| 5  | 薄雲441  | 明石の君    | 光源氏   | 大堰邸          | 飯ばかりはきこしめす時もあり。   |
| 4  | 明石244  | 明石入道    | 光源氏   | 明石           | ここはかかる所なれど、かやうにたちとまりたまふをりをりあれば、はかなきくだもの、強忘れしぬべき夜のさまなり。  |
| 3  | 若紫220  | 僧都      | 光源氏   | 北山           | 御くだものなどめづらしきさまにてまゐらせ、人々に酒強ひそしなどして、おのづからもの               |
| 2  | 夕顔162  | 惟光      | 光源氏   | 廢院           | 惟光、尋ねきこえて、御くだものなどまゐらす。                                  |
| 1  | 帚木95   | 紀伊守     | 光源氏   | 紀伊守邸         | 守、出でて来て、灯籠かけ添へ灯あかくかかげなどして、御くだものばかりまゐれり。                 |

本文

道長がくだものを供されているが、「御心地もこよなげにて、御果物などきこしめす。」(巻第十五・うたがひ②一七八―一七九頁)と、くだものを食せる程度に快復したことを示す。

次に、客人をもてなしたり外出先で食事をしたりする例が多くを占める。供される人は源氏や薫など、上流階級の人物である。4・13・14では、源氏や薫にはくだもの、供人には酒や肴がふるまわれている。くだものは上流貴族をもてなすのにふさわしいものであったことがわかる。このような例は、『うつほ物語』にも見られる。

御供の人々は、宮の家司ども、政所に呼びつけて、皆、さまざまに酒飲ます。大将には、よき菓物・乾物など、折敷よくして、御湯づけ・御酒など参る。(蔵開中巻五六五頁)

くだものを上流貴族のみに供し、供人と区別することは平安時代に共通した感覚であったと思われる。

また、供する人に焦点を当てると、女性が七例(10を含む)、男性が一〇例である。女性の場合は、六条院の主人である源氏が食する10を除き、その邸や部屋の主人格である。木谷眞理子氏は、13・14について、大君の薫へのもてなしが、八の宮存命時と異なることを指摘し、「くだもの、肴など」は、女主人が親疎と里ませた男性客人たちをもてなすのにふさわしいメニューなのである。』と述べる。確かに、女性が供するのに適したものであっ

たのだろう。

とはいえ、若干ではあるが、男性が供していることの方が多。男性が供する例を確認すると、供する人の身分が供される人より低い傾向にあることが注目される。2・17では、従者(惟光・時方)が、外出先で主人(源氏・匂宮)にくだものををさし出している。1の紀伊守、3の僧都、4の明石入道は、明らかに客人である源氏よりは身分が劣る。3では「見えぬさまの御くだもの」、4では「御くだものなどめづらしきさまにて」とあり、遠くからやって来た客人である源氏を、京とは異なった趣向でもてなすことのできるものがくだものであった。1の場合は、突然の来訪で慌てての準備であり、「くだものばかり」とあることから、謙遜も含まれるだろうが、精一杯のもてなしであるといえる。つまり、くだものは、京から離れた場所でも、急な来客であつても、上流貴族に失礼にならない程度のもてなしとして十分調達できるとあり、趣向を凝らすことで歓待の意味を示すこともできるものであった。また、くだものをもてなすことで、もてなす側の体面も保たれるほどのものであった。

12の藤侍従については、「主の侍従、殿上などもまだせねば」(竹河巻⑤六九頁)とあり、薫も同じ侍従であるが、位は下がる。また、この邸の主は玉鬘であるため、玉鬘からのもてなしとする意味合いもあるだろう。

さらに、9に注目する。9では、幻巻の当該場面と同様、くだものを供するよう命じている。これは、内大臣の母大宮のもとに

源氏が訪れていることを、内大臣が聞いたときのことである。内大臣は「いかにさびしげにていつくしき御さまを待ちうけきこえたまふらむ。御前どももてはやし御座ひきつくるふ人も、はかばかしうあらじかし。」(行幸卷③三〇三頁)などと、大宮主体のもてなしでは不十分であることを懸念している。そのため、子息や親しい殿上人(廷臣)らをさし向け、「御くだもの、御酒など」をもてなすよう命じる。「さりぬべく」とあることから、太政大臣である源氏をもてなすのにふさわしい、立派なもてなしを促しているといえる。ただし、「みづからも参るべきを、かへりてもの騒がしきやうならむ」(同)とあるように、自身が参上してかえつて騒がしい状況になることは控えたいと思っている。このとき、内大臣と源氏の間には政治的な問題もあり、軋轢が生じていた。自身が参上し対面することは気まずく憚られるものの、立派なもてなしを命じることで内大臣の威儀を示すことにもなる。

したがって、くだものは、突然の来訪や都からは離れた場所など、供応の準備が揃わない環境の中であつても、精一杯の接待の意味を込めることのできる手軽さとともに、上流貴族を鄭重にもてなすにふさわしい重さを併せ持つ食べ物であつた。

これらを踏まえて、幻巻の当該場面(11)に目を移すと、源氏が夕霧をもてなすためにくだものを準備させている。准太上天皇である源氏から見ても、もちろん息子の夕霧は位が下の相手である。他の用例とは一線を画するように見えるが、寧ろ弱気な言葉が発したときまり悪さを紛らわすために、鄭重なもてなしを命じる

という誇張した行為が必要であつたのではないだろうか。また、夕霧に対し、自身が紫の上の死に悲嘆し、呆けていると思われることを避け、威厳を保つ意味も持った。そうしてくだものを供することが、夕霧を源氏と対等な関係に押し上げたともいえる。

### 三 ことごとしさを避ける源氏

源氏のくだものをもてなす行為が話題をそらし、威厳を保つことにつながつたことを確認してきた。ただし、このとき源氏は、「女房、ここにくだものなどまゐらせよ。男ども召さんもことごとしきほどなり」と、男を召すのは「ことごとしき」時間であることを理由に、女房に準備を命じている。物語はなぜこのようなことを話題にしたのだろうか。ここでは、男を召さない理由である「ことごとし」の意味に着目して検討する。

なお、『源氏物語大成』によると、当該場面の「ことごとし」については青表紙本、河内本系統で異同はない。別本で「ことごとしき程なりとのたまふ」を「ことごとし」とする本があるものの、形容詞「ことごとし」自体が別の語に置き換えられているものはなかった。

「ことごとし」の語義については、中西良一<sup>12)</sup>氏、東辻保和氏<sup>13)</sup>、東郷吉男氏<sup>14)</sup>などの論考がある。いずれも意味的に近い「ものものし」などと比較し、その近接する語を検討することにより、「ことごとし」の性質を明らかにしている。その上で、中西氏は

「ことごとし」の意味内容は、「大袈裟」「仰々しさ」「勿体らしさ」に於いて把握せらるべきことは、ほぼ明らかであるが、全般に見て、美的ならざるもの、不快なるもの、悪しきものを指す場合のかなり多いことは、「ものものし」「いかめし」に比し顕著な相違点である。」と述べる。東辻氏は「ものものし」の無形で観念的な存在を形容する内在的な性質に対し、「ことごとし」の視覚や聴覚などにより外面に現れる性質について提起する。東郷氏は、『源氏物語』以外の平安期の文学作品に範囲を広げて調査し、「ことごとし」の「対象は、視覚・聴覚などで捉え得る顕在化したもののほか、心理的に把握されるものであることもある。」として、登場人物の心理面にも注意する。

『源氏物語』中の用例は、派生語である形容動詞「ことごとしげなり」四例を含めて一一八例ある。中でも特筆すべきが、打消の語を伴ったり、否定的な言い回しになっていたりする例の多いことである。東郷氏もこの点に着目し、「この語の内包するわざとらしさ・ぎょうぎょうしさを避けることこそ、平安人にとって、奥ゆかしくも望ましいものだった」と指摘している。今改めて源氏を主語とした「ことごとし」の行動に焦点を当ててみると、一三例中八例が源氏は「ことごとしく」ふるまっていない例である。以下、数例を挙げ、さらに源氏周辺に関連した「ことごとし」の例を見ることで、物語中の「ことごとし」の効果、役割を検討する。

A いと忍びて、ことさらにことごとしからぬ所をと、急ぎ出でたまへば、  
(帯木卷①九三頁)

B 我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことごとしくもてなしたまはず、所につけ人のほどにつけつつ、あまねくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなん、多くの人々年を経ける。

(初音卷③一五七—一五八頁)

C 御賜りの御封などこそ、みな同じごとと遜位の帝と等しく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式にはうげばりたまはず、世のもてなし思ひきこえたるさまざまは、心ことなれど、ことさらにそぎたまひて、例の、ことごとしからぬ御車に奉りて、上達部などさるべきかぎり、車にてぞ仕うまつりたまへる。  
(若菜上卷④四五頁)

Aは、方違えのため、紀伊守邸に向かう例である。方違えを口実にして、他の女の所へ行つたと葵の上方に思われるのは気まずいため、「ことさらにことごとしからぬ所」を選んで急いで出かける。Bは源氏の女君たちへのふるまいについてである。太政大臣である源氏は驕った態度になつてもおかしくないが、そのような態度は見せない。女君それぞれの身分に応じて皆にやさしくふるまい、多くの女君たちが源氏の庇護のもとで生活をしているという。Cは准太上天皇になつた源氏のふるまいを示す。本当の太上天皇のような儀式ばつた待遇を受けず、わざと簡素にして、朱

雀院への見舞いの際にも仰々しくない車を使う。

このように大仰なふるまいを避ける源氏の姿勢は他の者にも知られている。顕著な例として、玉鬘が主催した源氏四十の賀が挙げられる。

D心ばへありいまめかしく、尚侍の君、もののみやび深くかどめきたまへる人にて、目馴れぬさまにしなしたまへり。おほかたのことをば、ことさらにことごとしからぬほどなり。  
(若菜上巻④五六頁)

玉鬘(尚侍の君)は賀宴を準備する際、全体的な様相は仰々しくせず、細かなものに関して趣向を凝らし、目新しさを出したという。源氏は、「事のわづらひ多くいかめしきことは、昔より好みたまはぬ御心にて、」(若菜上巻④五五頁)とあるように、盛大なことを好まず、公の算賀も辞退したほどであった。そのような源氏の意向を汲み、過剰である「ことごとし」さは控えたのである。

「ことごとし」い行動を避けた源氏であるが、生来、周囲からは「ことごとしく」扱われてきたことも自覚している。

E源氏「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおほえありさま、来し方になぐり少なくなむありける。されど、また、世にすぐれて

悲しき目を見る方も、人にはまさりけりかし。

(若菜下巻④二〇六頁)

紫の上と自身の半生を述懐する場面である。幼い頃からたいそうな扱いを受けて育ち、その反面悲しい経験も多かったという。源氏は周囲から過剰に取り沙汰され、それに逆行するように「ことごとしき」ふるまいを控えるよう努めてきた。

幻巻でも、夜に夕霧をもてなすべく男性の従者を呼ぶ「ことごとしき」ふるまいはためらわれた。男性の従者のもてなしが仰々しさを示すことは、先に見た表1—9からも窺える。大宮を訪問している源氏を盛大にもてなすため、内大臣は「御子どもの君達、睦まじうさるべき廷臣たち」(行幸巻③三〇三頁)を遣わしていた。内大臣としては、自身の威勢を示し、内大臣一家の長として面目を保つ目的もあっただろう。

給仕係の性別については書かれていないものも多いが、たとえば、饗宴の場では、ある程度の身分のある男性が給仕を務めている。

袍衣のいろいろけぢめおきて、をかしき懸盤とりつづきて物まわりわたすをぞ、下人などは、目につきてめでたしと思へる。  
(若菜下巻④一七五頁)

銀の様器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛督、御まかなひ仕うまつりたまふ。  
(宿木巻⑤四八二頁)

若菜下巻の例は住吉参詣の折の供応で、袍を着用した役人が給仕役を務めており、下人などは見入っている。宿木巻の藤壺の藤花の宴はで、玉鬘の息子である左兵衛督が給仕役を務めている。すなわち、男性が給仕役を務めることは、ある程度の仰々しさを伴うのである。

従者の性別に関しては、『うつほ物語』に次のような記述が見える。

塗籠はなくて、中戸を立てて、東の方には北の方、西には中納言と、いと疎々しうて、女も召し使ひ給はず、使ひつけ給へる男をのみ召し使ひ給ひつおはず。

(国讓中巻七三七頁)

これは、長らく小野の山里で隠棲していた実忠が、兄に連れられ都に戻った後の様子である。実忠はあて宮を恋い煩い、想いが達せられなかったことで妻子を捨て山里に籠っていた。山里暮らしに馴れ、都に戻っても女は使わず男ばかりを使っている。隠遁生活が抜けきっていない様子が、従者の扱い方に現れている。つまり、男ばかりを使うことは隠遁生活に近いことでもある。須磨に退去した源氏が、従者数名を連れ、女性を伴うことのなかったことも思い合わされるだろう。

幻巻において、源氏の女房への対し方が次のように語られている。

年ごろ、まめやかに御心とどめてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうに思したりつる人々も、なかなか、かかるさびしき御独り寝になりては、いとおほぞうにもてなしたまひて、夜の御宿直などにも、これかれとあまたを、御座のあたりひき避けつつ、さぶらはせたまふ。

(幻巻④五二二頁)

源氏は時々目をかけていた女房も紫の上の死後は特別扱せず、大勢の女房たちを御帳台から遠ざけて控えさせていたという。他の女君のもとへも訪れることは絶え、訪れたとしても、「昔の御ありさまには、なごりなくなりたるべし。」(五三七頁)と、以前のように泊まることはなくなっていた。

さらに、当該場面において、「独り住みは、ことに変ることなけれど、あやしうさうさうしくこそありけれ。深き山住みせんにも、かくて身を馴らはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」(五三九—五四〇頁)と、今後出家して山籠りすることを念頭に置いている。女房を呼ぶことは、独り住みの寂しさを感じてしまっている自身をごまかすためでありながらも、寂しさを紛らわすことにも通じる。山住みを希求するはずの源氏にとつてはためらわれるべきことである。「ことごとしき」時間帯であるという言い訳をしながらも、女房を呼ぶことは、源氏のそのような微妙な心の揺れが現れているのではないだろうか。

#### 四 源氏と夕霧の関係

ここまでで、源氏の視点でくだものを供する行為について見てきた。源氏は紫の上の死を悲嘆し呆れていることを知られまいとして、くだものを女房に準備させる。ただし、女房に準備させるその行為こそが、出家を志すはずの源氏の迷いをも表していた。このような源氏に対し、夕霧はどのように対峙していたのだろうか。源氏と夕霧との関係性を見ていく。

夕霧が物語世界を見つめる視点人物として、語り手と一体化して第二部の源氏の動向を暴き立ててきたことについては、先行研究において多く論じられてきた。源氏と、源氏を見つめる夕霧との父子関係の希薄さについては、広瀬唯二<sup>18)</sup>氏や笹川勲<sup>20)</sup>氏が論じている。広瀬氏は、『源氏物語』の光源氏が理想の母性性を持つことで、母親のいない女君を惹きつけていることを述べた上で、「自分自身の子に対しては、ある意味で親であることを放棄している」と指摘する。少女巻において、源氏は夕霧の教育方針について論じ、夕霧を大学に入れるが、夕霧の「教育自体には携わっていない」。父親に頼ることのできない状況が、「夕霧の観察眼の育成に貢献し」、対等な立場で源氏と向き合う夕霧像を作り出したとする。笹川氏は、夕霧が「大殿の若君」「大殿腹の君」と呼称されること、本来父親が主導すべき元服儀礼を母方主導で行っていたことなどから、「父子関係の危うさ、希薄さを読み取るべ

き」と述べる。

確かに、幻巻の源氏も、夕霧をもてなそうとする姿は他人行儀である。ことごとしくならないように命じる配慮が、既に仰々しさを伴う。ただこれは、独り寝の寂しさを吐露した気まずさゆえでもある。

他方の夕霧は、源氏と対等な関係で対峙し、源氏の心境を見据えている。一部先述したが、源氏がくだものの準備を女房に命じた直後、夕霧の視点から次のように語られる。

心には、ただ空をながめたまふ御気色の、尽きせず心苦しければ、かくのみ思し紛れずは、御行ひにも心澄ましたまはんこと難くやと見たてまつりたまふ。ほのかに見し御面影だに忘れがたし、ましてことわりぞかしと思ひゐたまへり。

(幻巻④五四〇頁)

源氏がごまかそうとした独り住みの心細さ、物思いが尽きず出家に踏み切れない心境を、夕霧は「心苦し」く思い、正確に捉えている。

しかし、ここは「危うさ、希薄さ」というよりは、源氏と夕霧の成熟した関係を読み取るべきではないだろうか。ここでの夕霧の心境は、野分巻や第二部において、源氏の好色性をあぶり出し、反発し、慇懃に應對していたものとは異なる。夕霧は源氏の物思いの原因が紫の上への忘れがたい追慕の情にあることに、

「ましてことわりぞかし」と共感を示している。さらにこの後、夕霧は源氏と紫の上の一周忌について相談し、紫の上を偲ぶ歌を詠み交わす。夕霧は源氏の寂しさを解した上で、源氏の傍で宿直をする。

大将の君は、やがて御宿直にさぶらひたまふ。さびしき御独り寝の心苦しければ、時々かやうにさぶらひたまふに、おはせし世はいとけ遠かりし御座のあたりの、いたうもたち離れぬなどにつけても、思ひ出でらるることも多かり。

(幻卷④五四二頁)

紫の上在世中、源氏は夕霧を居所に決して近付けようとしなかつた。それが今は「たち離れぬ」状態になっていることに、夕霧は感慨深く懐古する。

源氏としても、紫の上が子を為さずに亡くなったことを残念がる夕霧に対して、自身も同じ気持ちであるといい、「そこにこそは、門はひろげたまはめ」(幻卷④五四一頁)と、子の多い夕霧に一家の繁栄を託している。

御法卷の紫の上の葬儀後においても、同様に夕霧が源氏の近くに仕え、源氏の心情を慮る様子は描かれていた。

明け暮れ近くさぶらひて、心苦しくいみじき御気色を、ことわりに悲しく見たてまつりたまひて、よろづに慰めきこえた

まふ。

(御法卷④五二二頁)

日夜近くで仕え、源氏の痛々しい姿を「ことわりに悲しく」思い、慰めている。ただし、この直後の夕霧は、野分の折に垣間見た紫の上の姿を、臨終に際して再び見た「夢の心地」(同)に酔いしれ、独詠までしている。源氏を慰めつつも、源氏は源氏で悲しみに暮れ、夕霧は夕霧で感慨に浸っていた。それに対して、幻卷では贈答歌が交わされている。

源氏なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす

とて、いとと空をながめたまふ。大将、

夕霧はととぎす君につてなんふるさとの花橘は今ぞさかりと  
(幻卷④五四一―五四二頁)

源氏が夕霧と歌を詠み交わしたことは、梅枝卷の薰物合後の酒宴で蛭宮、源氏、柏木、夕霧、弁少将の順に唱和した歌だけであった。このとき、源氏、夕霧は連続して詠んでいるわけではなく、源氏は蛭宮の、夕霧は柏木の歌を受けて詠んだもので、次のように源氏・夕霧相互の関連性は薄い。

〔源氏歌〕色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずもあらなん

〔夕霧歌〕心ありて風の避くめる花の木にとりあへぬまで吹  
きやよるべき  
(梅枝卷③四一一頁)

幻卷では、この後に女房たちも歌を詠んだことが記されるが、冥土と現世を往来するといわれるほととぎすを歌に詠み込み、亡き紫の上を偲ぶという共通項が認められる贈答歌は初めて最後のことである。

このような意思疎通のきっかけとなったのが、くだものの供応を命じる行為であった。くだものをもてなすことは、源氏としては虚無感をさらけ出さないための虚勢であったが、気安くも鄭重さを示し、相手を立てる意味を持つ。視点人物として源氏を見つめ続けてきた夕霧は、ここで露呈する源氏の心弱さも虚勢も受け入れ、歩み寄り労ることで、ようやく成熟した関係として対峙してきたのではないだろうか。それゆえ、夕霧は源氏と贈答し、源氏の次代を受け継いでゆくのである。

#### おわりに

『源氏物語』においてくだものは客人をもてなす鄭重さと、気安さを併せ持ったものであった。紫の上の死を嘆き悲しみつつ、それを人に見咎められることを危惧する源氏は、夕霧に対しても精一杯の虚勢を張ろうとする。この心理が、くだものの供応を命じる行為に現れている。それは、独り寝の寂しさを口ずさんでし

まったことをやり過ぎす意味もあった。ただし、「ことごとしきほど」を避け、女房を呼ぶことで、源氏にとっての山住みの難しさをも露呈する結果となっている。

しかし、夕霧はそれらもすべて包み込んで、源氏の心情を解している。紫の上を忘れがたく思っている気持ちに同情し、傍で控える。これまで源氏から距離を置かれ、離れた所から源氏を見据えてきた夕霧は、家門の繁栄を託され、次代を担っていく。紫の上という死を契機として変化した距離感によって、最晩年の源氏を温かく見つめる視点へと変わり、和歌を贈答する関係となり得たのではないだろうか。

#### 注

(1) 小町谷照彦氏「『幻』の方法についての試論——和歌による作品論へのアプローチ」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年、初出は『日本文学』一四一六 一九六五年六月)

(2) 神野藤昭夫氏「晩年の光源氏像をめぐって——幻巻をどう読むか——」(『今井卓爾博士古稀記念物語・日記文学とその周辺』桜楓社 一九八〇年)

(3) たとえば、伊藤博氏「食事」(『平安時代の信仰と生活』至文堂 一九九二年一月)、木谷眞理子氏「源氏物語と食」(『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月) などがある。

(4) 『源氏物語』『和漢朗詠集』『栄花物語』『枕草子』の本文

・巻・頁数は『新編日本古典文学全集』小学館により、『うつほ物語』は室城秀之氏校注『うつほ物語 全』おうふう 一九九五年による。ただし、私に注記や傍線を付した箇所がある。

(5) 玉上琢彌氏『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年による。

(6) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第九巻 角川書店 一九六七年

(7) 小島幸枝氏「菓子」(『講座日本語の語彙』第九巻 明治書院 一九八三年)

(8) 『源氏物語』中の「くだもの」の用例については、拙稿「大堰での食事——『源氏物語』薄雲巻における——」(『論究日本文学』九五 二〇一一年十二月)で一度考察を試みている。重複を含みつつ、男性が男性をもてなす場面であるという点に着目し、考察を加える。

(9) 明石の姫君が供されている例「こなたにて御くだもの参りなどしたまへど」(薄雲巻②四三三五頁)については、食したとも捉えられるが、宮腰賢氏「源氏物語・薄雲」御くだものまわりなどし給へど」の解釈——尊敬語「まある」考——(『学芸国語国文学』九 一九七四年一月)により、「参り」を「さしあげる」意と見たい。「召し上がる」と解したとしても、直後に「やうやう見めぐらして、母君の見えぬを求めてらうたげにうちひそみたまへば、」(同)

とあり、くだものより母のいないことに意識が移っていることがこの文の主眼である。

(10) 「くだもの」の用例からは外れるが、重態の柏木は「はかなき柑子など」(若菜下巻④二八四頁)さえ触れないことが語られている。この柏木については、拙稿「『源氏物語』の柑子——藤壺宮と柏木を結ぶ——」(『古代中世文学論考』第二八集 新典社 二〇一三年三月)において論じた。

(11) 木谷真理子氏「源氏物語と食」(『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月)

(12) 中西良一氏「源氏物語用語覚書——「ものものし」「いかめし」等について——」(『和歌山大学学芸学部紀要』二 一九六二年十二月)

(13) 東辻保和氏「源氏物語の語彙——ことごとし・ものものし——」(『解釈』一六一—一九七〇年一月)

(14) 東郷吉男氏「平安時代のモノモノシ・コトコトシ——付、試論モノ・コトの原義——」(『語源探求』三 明治書院 一九九一年十月)

(15) 中西氏・東辻氏・東郷氏三者は『源氏物語』中の用例を一一六例としており、若干の齟齬がある。一一八例の他に、特に別本において、青表紙本「うとうとし」を「ことごとし」とする異同が見られるが、用例数は『新編日本古典文学全集』に依った。

- (16) なお、「ことごとしさ」を避ける源氏に対して、夕霧が「ことごとし」い人物であると繰り返して語られていることには注意を要する。多くは第三部の匂宮の視点からであるが、玉鬘、落葉の宮からも「ことごとし」い身分であると思われている。源氏からも一例あり、玉鬘に自身の老いを語る中で「中納言のいつしかと儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。」(若菜上巻④五七頁)と、夕霧が自身の子を大げさに分け隔てて見せてくれないことを恨めしく思っている。夕霧が「ことごとし」さを避ける例もあるため、一概にはいえないが、夕霧の人物造型としてよく言われる「まめ人」に通じる性質であろう。
- (17) 女を使わないことについて、「疎々しうて」とある。これについては、『うつほ物語 全』が底本とした尊経閣蔵前田家十三行本では、「ことごとしうて」とあるといい、頭注において「疎々しうて」の誤りと見る説に従った」と注する。ここは女房を呼ぶ幻巻の源氏とは正反対であり、確かにこれまで男ばかりを使って生活してきた実忠の心情としては「疎々し」とする方が適当であろう。
- (18) 伊藤博氏「『野分』の後——源氏物語第二部への胎動」(『源氏物語の原点』明治書院 一九八〇年、初出は『文学』三五—八 一九六七年八月)、三谷邦明氏「野分巻における〈垣間見〉の方法——〈見るごと〉と物語あるいは〈見るごと〉の可能と不可能——」(『物語の方法Ⅱ』有精

堂出版 一九八九年、初出は『講座源氏物語の世界』第五集 有斐閣 一九八一年八月)、高橋亨氏「可能態の物語の構造——六条院物語の反世界」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会 一九八二年、初出は『日本文学』二二—一〇 一九七三年十月)などをはじめ、夕霧を「見る人」の立場から論じる論考は多い。

- (19) 広瀬唯二氏「母性と光源氏像——源氏物語における親子——」(『源氏物語の探究』第十三輯 風間書房 一九八八年七月)

- (20) 笹川勲氏「『大殿の若君』夕霧論——呼称からみた光源氏との父子関係について——」(『國學院大學大学院文学研究科論集』三六 二〇〇九年三月)

- (21) 蛭巻「中将の君を、こなたにはけ遠くもてなしきこえたまへれど、」(③二一六頁)、野分巻「大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、」(③二六五頁)などと、源氏は紫の上を夕霧の目の届かないよう用心していた。

(おぎた・みどり 舞鶴工業高等専門学校講師)